

『從吾道人語録』の研究

——「把卷録」(下)——

水野 実・三沢 三知夫編

序言

本稿は『從吾道人語録』の研究——「把卷録」(上)——に続く「把卷録」(下)の基礎的研究で体例等はすべて前稿に従うものである。なお『從吾道人語録』、董漢に関する略説は前々々稿を参照されたい。

この研究の参加者は次の通り。宮下和夫(早稲田大学助手)・阿部光麿(早稲田大学非常勤講師)・大場一央(早稲田大学大学院博士後期課程)・松野敏之(早稲田大学大学院博士後期課程)・中嶋諒(早稲田大学大学院博士後期課程)・小池直(早稲田大学大学院博士後期課程)・上村新治(早稲田大学大学院修士課程)・田村有見恵(早稲田大学大学院修士課程)・阿部亘(早稲田大学大学院博士後期課程)・原信太郎(早稲田大学大学院修士課程修了)・富岡健太郎(早稲田大学大学院修士課程修了)・三沢三知夫の十二名。全員で検討・修正した原稿を基に、原・大場・松野・三沢の諸兄と再度検討を行い、最後に三沢君と補正を行いまともしてもらった。

この度の研究成果の最後の責任は水野にあるが、参加者全員、特に三沢君をはじめ宮下・阿部光・松野君の業績でもあることを明記しておく。

【三十一】

知淵明之蓄琴、則知仲尼之佩環。

〔訓読〕

淵明の琴を蓄ふるを知らば、則ち仲尼の環を佩ぶるを知る。

〔語釈〕

○淵明 陶淵明（三六五—四二七）。字は淵明、或いは元亮という。名は潜。田園詩人として有名、五柳先生と称される。

○淵明蓄琴 陶淵明が無絃の琴を愛持していたことは、諸書に見える。例えば梁の蕭統の「陶靖節伝」に「淵明音律を解さず。而れども夢絃琴一張を蓄ふ」とある。

○仲尼之佩環 『礼記』経解篇に「天子は天地と参なり、故に徳、天地に配して、兼ねて万物を利し、日月と明を並べ、明らかに四海を照らして、微小を遺さず。其の朝廷に在るときは、則ち仁聖礼義の序を道ひ、燕処には則ち雅頌の音を聴き、行歩には則ち環佩の声有り」とあり、これにもとづくか。

〔校異〕（一）

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【三十二】

五柳之眉、非等間攢也。百世而下、当有子雲。

〔訓読〕

五柳の眉、等間に攢するに非ず。百世而下、当に子雲有るべし。

〔語釈〕

○五柳 陶淵明のこと。前則の語釈を参照。

○等間 ありきたりである。

○攢 「攢眉」でまゆをひそめること、心の不愉快なさま。

○百世而下 百世以下。とおい将来のことか。

○子雲 揚雄のこと。揚雄(前五三―後一八)は、字子雲。著書に『太玄経』、『法言』等がある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【三十三】

吾説莊生非迂者也。執天之機、明於天下之故者也。獻齋与之積之、南華復生、無余蘊矣。

〔訓読〕

吾れ莊生を讀むに迂なる者に非ざるなり。天の機を執り、天下の故を明らかにする者なり。獻齋之が与に之を積し、南華復た生じて、余蘊無し。

〔語釈〕

○天之機 『莊子』内篇大宗師篇に「屈服する者は、其の喙くわい言は哇わぶが若し。其の嗜欲深き者は、其の天機淺し」、『莊子』外篇天運篇に「天機張らずして五官皆な備はり、く此を之れ天楽と謂ふ」、『莊子』外篇秋水篇には「今予吾が天機を動かして其の然る所以を知らず」とある。

○獻齋与之積之 未詳。林希逸(一一九三―?)の『鷹齋口義』のことか。

○南華 莊子のこと。

〔校異〕（一）

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）

本則は『明儒学案』には収められていない。

【三十四】

文中子言心迹之判。晦翁以為乱道、恐未易言也。天下之事、泥其迹而不求其心、劍去久矣。白沙詩云、隨時有憂樂、与物無方円。其知此乎。

〔訓読〕

文中子、心跡の判を言ふ。晦翁以て道を乱すと為すも、恐らくは未だ言ひ易からず。天下の事、其の跡に泥みて其の心を求（去）めざれば、劍去ること久し。白沙の詩に云ふ、「時に随ひ憂樂有り、物に与かりて方円無し」と。其れ此を知るか。

〔語釈〕

○文中子 王通（五八四―六一六）、字仲淹。著書に『文中子』がある。

○心迹之判 『文中子』巻五、問易篇に、「子曰く、微の問ふ所の者は跡なり。吾の汝に告ぐる者は心

なり。心跡の判るるや久し」とある。

○晦翁以為乱道 朱熹の王通評価は、『朱子語類』卷一百三十七などに見えるが、王通の「心跡の判」を「道を乱す」とする箇所はない。なお程頤は、『河南程氏遺書』卷第十五、九七条で「是の心有らば則ち是の跡有り。王通心跡の判を言ふは、便ち是れ乱説なり」といい、これは『近思録』卷之十三、辨異端類に収められている。『朱子語類』には、この程頤の言が二度ほど引かれている（卷六十四、一四八条・卷一百十六、四九条）ので、「晦翁以為乱道」とはそれを念頭においたものか。王守仁は王通については「文中子は賢儒なり。愛問ふ、何を以て擬經の失有りや、と。先生曰く、擬經恐らくは未だ尽くは非とすべからず」（『伝習録』上、一一条）という。また同五五条にも「統經亦た未だ尽くは非とすべからず」とある。

○白沙 陳献章（一四二八—一五〇〇）。字公甫、号石齋。白沙先生と称される。

○劍去久 『祖堂集』卷第十五に「劍去ること遠くして念して舟に刻するのみ」とあり、これは『呂覽』察今の「刻舟求劍」をふまえる。「劍去久」は物事のうつりかわりやその本質を理解しないことをいう。

○隨時有く無方円 『陳白沙集』卷四、中秋に、「広冥天自然、浮雲任飄翻。隨時有憂楽、与物無方円。酒底月未咽、水中神莫伝。去年今夜艇、吾欲破湘煙」とある。

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【三十五】

觀象山語録、大抵以尊徳性為主。至論格物、則曰、研究物理。又曰、博学在先、力行在後。吾子学未博、焉知所行者是當為、是不當為。此二説、又与考亭正合。不知、当時相攻者何也。

〔訓読〕

象山語録を觀るに、大抵尊徳性を以て主と為す。格物を論ずるに至れば、則ち曰く、物の理を研究す、と。又曰く、博学は先に在り、力行は後に在り。吾子の学未だ博からざれば、焉んぞ行ふ所の者は是れ當に為すべきか、是れ當に為すべからざるかを知らん、と。此の二説は、又考亭と正に合す。知らず、当時相攻むる者は何ぞや。

〔語釈〕

○象山語録 陸九淵(一一三九—一一九二)の語録。陸九淵は、字子静、象山先生と称され、朱熹の論敵として有名。

○尊徳性 『中庸』に、「故に君子は、徳性を尊びて問学に道り、廣大を致して精微を尽くし、高明を極めて中庸に道り、故きを温めて新しきを知り、敦厚にして以て礼を崇ぶ」とある。

○尊徳性為主 朱熹が「尊徳性」・「道問学」を併せ尊ぶのに対して、陸九淵は「尊徳性」を重視する。『象山全集』巻三十四、語録上に「朱元晦書を作り学者に与へて云ふ、陸子静は専ら徳性を尊ぶを以て人を誨ふ。故に其の門に遊ぶ者、踐履の士多し」とある。なおこの「朱元晦作書」は『朱文公文集』巻第五十四、答項平父（二）である。

○至論格物と研究物理 『象山全集』巻三十五、語録下に、「伯敏曰く、箇の手を下す処無し、と。先生曰く、格物は是れ手を下す処、と。伯敏曰く、如何なる様か格物、と。先生曰く、物理を研究す」とある。

○格物 『大学』に「古の明德を天下に明らかにせんと欲する者は、先ず其の国を治む。其の国を治めんと欲する者は、先ず其の家を斉ふ。其の家を斉へんと欲する者は、先ず其の身を修める。其の身を修めんと欲する者は、先ず其の心を正す。其の心を正さんと欲する者は、先ず其の意を誠にす。其の意を誠にせんと欲する者は、先ず其の知を致す。知を致すは物を格すに在り」とある。

○博学 『中庸』に「博く之を学び、審らかに之を問ひ、慎しみて之を思ひ、明らかに之を弁じ、篤く之を行ふ」とある。

○博学在先く是不当為 『象山全集』巻三十五、語録下に、「先生曰く、格物は先きに在り、力行は後に在り。吾が友の学未だ博からず、焉んぞ行ふ所の者、是れ当に為すべき、是れ当に為さざるべ

きかを知らん」とある。

○力行 『中庸』に「学を好むは知に近し、力めて行ふは仁に近し、恥を知るは勇に近し」とある。

○考亭 朱熹のこと。朱熹は晩年、考亭に竹林精舎を建て講学をおこなった。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【三十六】

象山論漢唐近道者、趙克国・黄叔度・楊綰・段秀実・顔真卿。愚意不知仲舒・孔明・靖節・徐幹四子何如。

〔訓読〕

象山、漢唐の道に近き者、趙克国・黄叔度・楊綰・段秀実・顔真卿と論ず。愚意へらく仲舒・孔明・靖節・徐幹の四子何如なるかを知らず、と。

〔語釈〕

○象山論く顔真卿 『象山先生全集』卷三十五、語録下に「漢唐近道者、趙充国・黄憲・楊綰・段秀実・顔真卿」とある。

○趙克国 前引の『象山先生全集』に従い、趙充国の誤りとする。趙充国は前漢の武将。字は翁孫。匈奴討伐に功があった。

○黄叔度 黄憲。後漢、慎陽の人。考廉にあげられ、京師に到るが為すところ無くして帰った。

○楊綰 唐、華陰の人。字は公權。有能で官は大曆中、中書侍郎・同中書門下平章事。

○段秀実 唐、汧陽の人。字は成公。長じて明経に挙げられ、朱泚の反にいつわり合して討とうと計ったが殺される。

○顔真卿 唐、臨沂の人。字は清臣。開元中の進士。安祿山の乱の平定に功あり、その後、貶せられる。李希烈の反において捕らえられ帰順を求められたが、拒んで殺される。

○仲舒 董仲舒のこと。

○孔明 諸葛亮のこと。孔明は字。

○靖節 陶淵明の諡号。

○徐幹 三国魏、北海の人。字は偉長。建安七子の一。著書に『中論』がある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【三十七】

象山論李・杜・淵明、皆有志於吾道。愚意淵明固志道者、少陵自比稷契忠愛惓惓。又其詩曰、坐覺聞晨鐘、令人發深省。又曰、王侯与螻蟻、同尽随丘墟。願將第一義、回向心地初。又曰、水 flowing 心不競、雲在意俱遲。似亦有意哉。惟謫仙尚未可曉。韋・柳・簡齋亦不為無見也。

〔訓読〕

象山、李・杜・淵明、皆な吾が道に志有り、と論ず。愚意へらく、淵明は固より道に志す者、少陵は自ら稷契に比し忠愛惓惓たり。又其の詩に曰く、坐ろに覺めて晨鐘を聞けば、人をして深省を發かしむ、と。又曰く、王侯と螻蟻と同じく尽きて丘墟に随ふ。願はくは第一義を將て、心地の初めに回向せん、と。又曰く、水流れて心競はず、雲在りて、意は俱に遅し、と。亦た意有るに似たるかな。惟だ謫仙のみは尚ほ未だ曉るべからず。韋・柳・簡齋も亦た見無しと為さず。

〔語釈〕

○象山論李・杜・淵明、皆有志於吾道 『象山先生全集』卷三十四、語録上に「李白・杜甫・陶淵明、皆な吾が道に志すこと有り」とある。

○少陵 杜甫の号。

○少陵自比稷契 周必大『二老堂詩話』「韓杜自比稷契」に「子美の詩は自ら稷と契と比す。退の詩は事業は稷契を窺ふと云ふ」とある。

○稷契 堯舜に仕えた二人の名臣。稷は農業、契は教育をつかさどる。

○坐覚聞晨鐘、令人發深省 『杜工部詩集』卷一、「遊龍門奉先寺」に「欲覺聞晨鐘、令人發深省」とある。

○王侯与螻蟻、同尺随丘墟。願將第一義、回向心地初 『杜工部詩集』卷五、「謁文公上方」に「王侯与螻蟻、同尺随丘墟、願聞第一義、廻向心地初」とある。

○水流心不競、雲在意俱遲 『杜工部詩集』卷十一、「江亭」。

○謫仙 李白をいう。

○韋柳 韋応物と柳宗元。

○簡齋 宋の陳与義。字は去非。号は簡齋・無住。政和の進士。詩作に巧みで『簡齋集』がある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【三十八】

一日先師謂余曰、吾昨因処骨肉之間、覺得先儒著書有未盡者。且如舜父頑母嚚一節、以余意觀之、舜父頑母嚚象傲、舜則能諧之以孝、丞蒸然自進於善、未嘗正彼之奸。久之、瞽叟亦信順之矣。俱在自家身上說。若有責善之意則彼未必正、而是非先起矣。甚哉骨肉之難處也。愚謂、先師此言真是実受用處、以身体之、方是解經。若依旧說都在効驗上去了。

【訓読】

一日、先師余に謂ひて曰く、吾昨ごろ骨肉の間に処するに因りて、先儒の著書に未だ尽くさざる者有るを覺(得)ゆ。且如へば舜の父は頑、母は嚚の一節、余の意を以て之を觀れば、舜の父の頑、母の嚚、象の傲なる、舜則ち能く之を諧ぐるに孝を以てし、丞蒸然として自ら善に進み、未だ嘗て彼の奸を正さず。之を久しくして、瞽叟も亦た之を信順す。俱に自家の身上に在りて説く。若し善を責むるの意有らば、則ち彼未だ必ずしも正されずして是非先ず起ころ。甚だしきかな、骨肉の処し難きや、と。愚謂へらく、先師の此の言は真に是れ実に受用の処にして、身を以て之を体して、方めて是れ經を解するなり。若し旧に依りて説かば、都て効驗上に在(去)り。

【語釈】

○丞蒸 『陽明先生遺言録』にしたがえば「丞丞」の誤り。「丞丞」は孝順なさま。

○舜父頑母嚚一節 『尚書』堯典第一に「岳曰く、瞽の子なり。父は頑に、母は嚚に、象は傲なれども、克く諧し、孝を以て烝烝、又めて格姦せず」とある。

〔校異〕(一)

○覺得先儒著書有未尽者 『陽明先生遺言録』上、四六条は「覺得先儒註書有未尽者」に作る。

○丞蒸然自進於善 『陽明先生遺言録』上、四六条は「丞蒸然自進於善」に作る。

○未嘗正彼之奸 『陽明先生遺言録』上、四六条は「未必正彼之姦」に作る。

○愚謂、先師此言真是実受用処、以身体之、方是解經。若依旧說都在効驗上去了 『陽明先生遺言録』上、四六条にはこの三十一字が無い。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。ただし『伝習録』下、九六条に類似の議論があり、「(前略) 此は是れ舜の『心を動かし性を忍ばしめ、能はざるところを増益せしめ』し処なり。古人の言語は、俱に是れ自家経歴し過ぎ来たりしところ、説き得て親切に、之を後世に遺して、曲に人情に当る所以なり。若し自家経過するに非ずんば、如何ぞ他が許多の苦心の処を得んや」とある。本則も『伝習録』下、九六条と同じく自己の体認を重視している。ただ『伝習録』下、九六条の方では王守仁が一方的に言うかたちを取るが、本則の方では王守仁の対論者が董濂であり、董濂の問いに答えたものであったことが明らかである。なお『陽明先生遺言録』上、四六条でも王守仁の対論者は董濂であるが、問いかけをしたのが董濂であるということを示す部分がない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【三十九】

嘗觀張子韶所註四書、真能以身体之。如微生高一章、大抵高之為人徑情直行而無委曲。如言丘之棲棲可見其詞之峻也、殊不知、人雖峻直、意實慈祥。且如或乞醯焉、是必其人之急用也。鄙吝之人雖有言無者多矣。稍善於此者、有則曰有、無則曰無、斯已矣。孰肯周旋以濟其急哉。彼則乞諸其隣以与之。雖一小事充之則万物一体。故聖人羨之。愚謂此說最好、見聖人微頭闡幽之意。

〔訓読〕

嘗て張子韶の註する所の四書を觀るに、真に能く身を以て之を体す。微生高の一章の如きは、大抵、高の人と為りや徑情直行にして委曲無し。丘の棲棲として其の詞の峻を見るべしと言ふが如きは、殊に知らず、人、峻直と雖も、意は實に慈祥なるを。且如へば或ひと醯を乞ふは、是れ必らず其の人の急用ならん。鄙吝の人は有りと雖も無しと言ふ者多し。稍や此より善き者は、有れば則ち有りと曰ひ、無ければ則ち無しと曰ふ、斯れのみ。孰か肯へて周旋し以て其の急を濟はんや。彼は則ち諸れを其の隣に乞ひ以て之に与ふ。一小事と雖も之を充たせば則ち万物一体なり。故に聖人之を羨む。愚謂へらく此の説最も好く、聖人微頭闡幽の意を見ず。

〔語釈〕

○張子韶所註四書 張子韶の著書に『論語絶句』があることが確認される。

○微生高一章 『論語』公治長篇に「孰か微生高を直なりと謂ふ。或ひと醜を乞ふ。諸を其の隣に乞ひて之を与ふ」とある。

○径情直行 思つたことを、そのまま行動にうつす。

○委曲 すみずみまでゆきとどいている。

○如言丘之棲棲可見其詞之峻也 「丘之棲棲」の「棲棲」というのは、「仲尼は棲棲、墨子は遑遑」

(『後漢書』蘇竟伝)に典拠をもち、ばたばたと忙しく、安んじていない意。この「丘之棲棲」というのは、孔子が微生高に対して不満であることをいう。朱熹の「夫子此を言ふは、其の意を曲げ物に殉ひ、美を掠め恩を市るを譏り、直と為すを得ず」(『論語集注』)という解釈を念頭においてのものである。

○有則曰有、無則曰無 『論語集注』の圈外説に「范氏曰く、是は是と曰ひ、非は非と曰ひ、有は有と謂ひ、無は無と謂ふを、直と曰ふ。聖人、人を其の一介の取予に観て、千駟万鐘従りて知るべし。故に微事を以て之を断じ、人をして謹しまざるべからざらしむ所以なり」とある。

○愚謂此説最好 「此説」とは前述の范氏の説をさすか。董澐は范氏の説によりながら、微生高の行為を万物一体であると積極的に評価する。

○微頭闡幽 『易』繫辭下に「夫れ易は、往を彰らかにして来を察す。微を頭にして幽を闡らかにす」とある。なお『程伝』・『本義』では「微頭」を「頭微」に改めるべきだとする。

〔校異〕（一）

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）

本則は『明儒学案』には収められていない。

【四十】

莊子曰、賊莫大乎徳有心、而心有眼。又曰、尽其所受乎天、而無見得。至哉言乎。

〔訓読〕

莊子曰く、賊は徳に心有りて心に眼有るより大なるは莫し、と。又曰く、其の天より受くる所を尽くして、得るを見る無かれ、と。至れるかな言や。

〔語釈〕

○賊莫大乎徳有心、而心有眼 『莊子』雜篇列御寇篇。

○尽其所受乎天、而無見得 『莊子』内篇応帝王篇。

〔校異〕（一）

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）

本則は『明儒学案』には収められていない。

【四十一】

浹際鄭先生曰、秦火焚書而書存、漢儒訓經而經滅。此雖激論亦真言也。

〔訓読〕

浹際鄭先生曰く、秦火、書を焚して書存す、漢儒、經を訓じて經滅す、と。此れ激論と雖も亦た真言なり。

〔語釈〕

○浹際鄭先生 鄭樵。「求心録」下【四十】則に既出。

○秦火焚書而書存、漢儒訓經而經滅 『校讐略』第一、秦不絶儒学論。

〔校異〕（一）

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）

本則は『明儒学案』には収められていない。

【四十二】

宋儒周程之外龜山・象山・慈湖・王信伯・謝上蔡・温公・元城・趙清猷・陳了翁・李樂庵・張子韶・林希逸諸公皆深於斯道者也。晦翁晚年見亦高矣。

〔訓読〕

宋儒、周程の外、龜山・象山・慈湖・王信伯・謝上蔡・温公・元城・趙清猷・陳了翁・李樂庵・張子韶・林希逸の諸公も皆な斯道に深き者なり。晦翁の晩年の見も亦た高し。

〔語釈〕

○元城 劉安世。字は器之。元城先生。司馬光に師事する。剛直を以て殿上虎と呼ばれた。

○趙清猷 趙抃。字は閱道。号は知非子。諡が清猷。高位の者も恐れずに弾劾し、王安石と合わなかつた。

○陳了翁 陳瓘。字は瑩中。号は了翁。諫官の時、蔡京に逆らい貶せられた。

○李樂庵 李衡。字は彦平。号は樂庵。外戚張説が節度使となり兵權を握った時、其の事を疏し争つた。

○晦翁晚年見亦高矣 晦翁晚年見亦高矣 王守仁の「朱子晩年定論」を念頭におくものであろうか。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない

【四十三】

程子曰、死生存亡皆知所從來、胸中瑩然無疑、止此理耳。孔子告子路、蓋略言之。死之道即生是也。更無別理。程子此言極妙、集註不載。性理書有之。

〔訓読〕

程子曰く、死生存亡、皆な従りて來たる所を知れば、胸中瑩然として疑ひ無く、止だ此れ理のみ、と。孔子、子路に告ぐるは、蓋し略ぼ之を言へり。死の道は即ち生、是れなり。更に別理無し、と。程子の此の言、極めて妙なるも、集註載せず。性理の書は之有り。

〔語釈〕

○死生存亡皆所從來、胸中瑩然無疑、止此理耳。…更無別理 『河南程氏遺書』卷第二上、三二二条には「死生存亡皆知所從來、胸中瑩然無疑、止此理爾。孔子言未知生、焉知死、蓋略言之。死之事即生是也、更無別理」とあり、本則の引用と字句の異同がある。

○孔子告子路、蓋略言之 『論語』 先進篇の「季路、鬼神に事へんことを問ふ。く曰く、未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん」のこと。

○性理書 『性理大全』を指す。『性理大全』卷二十八、「論生死」では前掲の『河南程氏遺書』卷第二上、三二条をそのまま引く。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【四十四】

曾子啓手足、蓋言免於肉刑耳。然君子保守未必全在於手足也。心可必、手足不可必。孝經不敢毀傷之言、拳小以例大耳。不然比干其非仁乎。

〔訓読〕

曾子、手足を啓かしむは、蓋し肉刑を免るるを言ふのみ。然るに君子の保守は未だ必しも全くは手足に在らず。心は必とすべきも、手足は必とすべからず。孝經の敢へて毀傷せざるの言は、小を拳げて以て大を

例ふるのみ。然らざれば比干、其れ仁に非ざるか。

〔語釈〕

○曾子啓手足 『論語』泰伯篇に「予が足を啓け、予が手を啓け。詩に云ふ、戰戰兢兢として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如しと。而今よりして後、吾免るることを知るかな、小子」とある。

○孝経不敢毀傷之言 『孝経』開宗明義章第一に「身体髮膚、之を父母に受く。敢へて毀傷せざるは孝の始まりなり」とある。

○挙小以例大 「小」とは「手足」、「大」とは「心」を指す。

○不然比于其仁乎 『論語』微子篇に「微子はこれを去り、箕子はこれが奴と為り、比干は諫めて死す。孔子曰く、殷に三仁あり」とある。比干は紂によって心臓をえぐり取られたという点で肉刑を免れることができなかったが、「心」を全うした点では仁であるというのが董湮の意である。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【四十五】

屨空者何晏以為虛中是也。惟其有屨、故曰庶乎。旧註以為貧者恐泥於簞瓢章耳。苟以其貧而對子貢之求富、似又泥矣。各為一端無害。然竊意、賜不受命者蓋言賜不能安於所賦之理、而漁獵耳目多聞強記以自衒、每於事未至而意之、取其屨中以為多能也。中不能虛去道遠矣。而以為貨財生殖、豈亦泥於無詔章乎。吾推龜山之說如此。

〔訓読〕

屨、空しは何晏、以て虚中と為すは是なり。惟だ其の屨、有り、故に「庶し」と曰ふ。旧註以て貧と為す者は恐らく簞瓢の章に泥まん。苟くも其の貧を以て子貢の富を求むるに對すれば、又泥むに似たり。各、一端にして害ふ無しと為す。然るに竊かに意へらく、賜の命を受けざる者は、蓋し賜の賦する所の理に安んずる能はずして、耳目の多聞を漁獵し強記し以て自ら衒、毎に事に於て未だ至らずして之を意ひ、其の屨、中るを取りて以て多能と為すを言ふ。中は虚なる能はざれば、道を去ること遠し。而して以て貨財生殖と為すは、豈に亦た無詔の章に泥むか。吾、龜山の説を推すこと此くの如し。

〔語釈〕

○屨空 『論語』先進篇に「子曰く、回や其れ庶きか。屨、空し。賜は命を受けずして貨殖す。億れば則ち屨、中る」とある。

○屨空者何晏以為虚中 何晏の注に「屨は猶ほ毎のごとし。空は猶ほ虚中のごとし」（『論語註疏解経』卷第十一）とあることをさす。

○旧註以為貧者恐泥於簞瓢章耳 「旧註以為貧者」とは邢昺の疏に「空は匱なり。く数しば空匱貧窶、而れども樂しみ其の中に在り」(『論語註疏解經』卷第十一)とあることをさす。「空匱貧窶」とは貧乏のこと。「簞瓢章」には「一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其の憂ひに堪えず、回や其の樂しみを改めず。賢なるかな回や」(『論語』先進篇)とある。

○一端無害 何晏の説・旧註の説とも一方に偏つてそれほど良くないことをいう。この「一端無害」とは、『論語』子罕篇に「鄙夫の我に問ふ有り、空空如たり、我其の兩端を叩きて喝くす」とあつて孔子が不偏であることと比較したものである。

○衒鬻 自分の思想・言論・作品をひけらかし、売り出そうとすること。『漢書』の東方朔伝に「四方の士、上書して得失を言ふ多し、自ら衒鬻する者は千を以て數ふ」とある。

○無詔章 『論語』学而篇に「子貢曰く、貧しくして諂ふこと無く、富みて驕ること無きは、何如。子曰く、可なり。未だ貧しくして樂しみ、富みて礼を好む者には若かざるなり」とある。

○龜山之說 『龜山集』卷十一、語録二、二二二条に「問ふ、何をか屢々空しと謂ふ、と。曰く、此れ顔子の殆ど庶幾き所以なり。学びて聖人に至り、則ち一物も胸次に留めざるは、乃ち其の常なり。

回、未だ此に至らず、屢々空し。之を屢々空しと謂ふは則ち時として空ならざる有り」、二二三条に「屢々空しは則ち至誠の前知に非ず。故に取るに足らず」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔四十六〕

拠莊子金椎控頤之言、至於作賊、則當時儒者之弊已極。觀太史公以九家並列、則儒者之名其卑久矣。想春秋時已不知儒、或見記誦弁博者、即以此名歸之。故聖人指真儒、以告子夏歟。

〔訓読〕

莊子の金椎もて頤を控くの言に拠れば、賊を作すに至るは、則ち當時の儒者の弊已に極まれり。太史公、九家を以て並列するを觀れば、則ち儒者の名其れ卑しきこと久し。想ふに春秋の時、已に儒を知らず、或いは記誦弁博なる者を見て、即ち此の名を以て之に歸するならん。故に聖人、真儒を指して、以て子夏に告げるか。

〔語釈〕

○金椎控頤之言 『莊子』雜篇外物篇に「其の鬢を接み、其の顛を摩へて、金椎を以て其の頤を控き、徐ろに其の頬を別ち、口中の珠を傷ふこと無し」とある。この引用の前後には當時の儒者がいかに墮落していたかが述べられている。

○太史公以九家並列 『史記』「太史公自序」には司馬談の六家批判が載せられており、諸家は六家に分類されていることになる。

○聖人指真儒、以告子夏 『論語』雍也篇の「子、子夏に謂ひて曰く、女、君子の儒と為れ。小人の儒と為ること無かれ」をさす。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【四十七】

子張学干祿。想必古人亦是修飾言行以媒祿。如孟子云、今之人修天爵以要人爵、又曰、經德不回非以干祿也。可見、古人皆以經德干祿矣。此正是小人儒、如後生終南捷徑之類。心雖作偽而口不顯言也。自舉業之習興、則以浮詞自薦、明言干祿。視小人儒、有穿窬大盜之分、併餽羊而去之矣。噫宜為豪傑之所鄙哉。

〔訓読〕

子張、禄を干めんことを学ぶ。想ふに、必ず古人も亦た是れ言行を修飾し以て禄を媒とす。孟子の、今の人、天爵を修め以て人爵を要む、と云ひ、又、経なる徳回らざるは、以て禄を干むるに非ざるなり、と曰ふが如し。古人は皆な経なる徳を以て禄を干むるを見るべし。此れは正に是れ小人の儒、後生の終南捷徑の類の如し。心は偽を作すと雖も而れども口は言を頭はさず。挙業の習興りてより、則ち浮詞を以て自ら薦め、禄を干むと明言す。小人の儒を視るに、穿窬・大盜の分有り、餽羊を併せて之を去る。噫、宜なり、豪傑の鄙しむ所と為るは。

〔語釈〕

○子張学干禄 『論語』為政篇に「子張、禄を干めんことを学ぶ。子曰く、多く聞きて疑はしきを闕き、慎しみて其の余りを言へば、則ち尤寡なし。多く見て殆ふきを闕き、慎しみて其の余りを行へば、則ち悔寡なし。言に尤寡なく行に悔寡なければ、禄は其の中に在り」とある。

○修飾 「飾」字は「飾」字に同じ。

○孟子云、今之人修天爵以要人爵 『孟子』告子章句上に「孟子曰く、天爵なる者有り、人爵なる者有り。仁義忠信、善を楽しみて倦まざるは、此れ天爵なり。公卿大夫は、此れ人爵なり。古の人は其の天爵を修め、而して人爵之に従う。今の人はその天爵を修めて、以て人爵を要む。既に人爵を得ば、其の天爵を棄つ。則ち惑へるの甚しき者なり。終に亦た必ず亡はんのみ」とある。

○経徳不回非以干禄也 『孟子』尽心章句下に「孟子曰く、堯舜は性のままなる者なり。湯武は之に

反るなり。容を動かし周旋して礼に中る者は、盛徳の至なり。死を哭して哀しむは、生者の為に非ざるなり。経なる徳回らざるは、以て禄を干むるに非ざるなり」とある。

○終南捷徑 官職や名利を求めるとはやみち。

○浮詞 中身のないかざりたてたことば。

○穿窬 『論語』陽貨篇に「其れ猶ほ穿窬の盜のごときか」とある。

○饑羊 『論語』八佾篇に「子貢、告朔の饑羊を去らんと欲す。子曰く、賜や、女は其の羊を愛む、我は其の礼を愛む」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【四十八】

慈湖先生云、少年聞先大夫之訓、後於太学循理齋燕坐反觀、忽見我与天地万物万事万理澄然一片。向者所見、万象森羅謂是一理貫通耳。疑象与理未融。今、澄然一片更無理与象之分、亦無間斷。不必言象、不必

言理、不必言万、亦不必言一。喚作天亦得、喚作地亦得、喚作人亦得、喚作象亦得、喚作理亦得、喚作万亦得、喚作一二三四亦得。噫、慈湖悟後之言也。今人不信有悟、好以推測之心求之。愈求則愈疑耳。然疑是好消息、要在善疑。愈疑則愈進、愈進則愈退、愈退則幾矣。

〔訓読〕

慈湖先生云ふ、少年にして、先大夫の訓を聞きて、後に太学の循理齋に於て燕坐し反觀すれば、忽ち我と天地万物万事万理と澄然として一片たるを見る。向に見る所は、万象森羅是れ一理貫通を謂ふのみ。疑ふらくは、象と理と未だ融けざるか。今、澄然として一片たりて、更に理と象と分無く、亦た間斷無し。必ずしも象と言はず、必ずしも理と言はず、必ずしも万と言はず、亦た必ずしも一と言はず。天と喚び作すも亦た得、地と喚び作すも亦た得、人と喚び作すも亦た得、象と喚び作すも亦た得、理と喚び作すも亦た得、万と喚び作すも亦た得、一二三四と喚び作すも亦た得、と。噫、慈湖の悟りて後の言なり。今人悟り有るを信ぜず、好みて推測の心を以て之を求む。愈々求むれば則ち愈々疑ふのみ。然れども疑ふは是れ好消息にして、要は善く疑ふに在り。愈々疑へば則ち愈々進み、愈々進めば則ち愈々退き、愈々退けば則ち幾し。

〔語釈〕

○慈湖先生云、く喚作一二三四亦得 『慈湖遺書』卷十五、家記九には「先生曰、少年聞先大夫之誨、宜時復反觀、其後於循理齋燕坐反觀、忽然見我与天地万物万事万理澄然一片。向者所見、万象森羅謂是一理通貫爾。疑象与理未融一。今、澄然一片、更無象与理之分、更無間斷。不必言象、不必言理、亦不必言万、亦不必言一。く喚作天亦得、喚作地亦得、喚作人亦得、喚作象亦得、喚作理亦得、

喚作万亦得、喚作一、二、三、四と喚び作すも亦た得、一二三四と喚び作すも皆な亦た得」とあり、
本則の引用と字句の異同がある。

○一理貫通 『論語』里仁篇に「子曰く、参や、吾が道は一以て之を貫く。曾子曰く、唯」とあり、
『大学章句』格物補伝に「必ず学者をして凡そ天下の物に即きて、其の已に知るの理に困りて益、
之を窮め、以て其の極に至ることを求めざること莫からしむ。力を用ふることの久しくして、一旦
豁然として貫通するに至りては、則ち衆物の表裏精粗、到らざること無く、而して吾が心の全体大
用、明らかならざること無し」とある。

○喚作 「叫做」と同じ意。ゝと呼ぶ、ゝと名づける。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【四十九】

余友彭日華性頤利。嘗謂余曰、曾見旧本、中庸集解費隱章云、費而隱、言費而隱也。當時言下大悟後、

竟忘之、思量不出。余於丙戌歲、聞於先師、始知此意。蓋子思政恐後人作体用看了。故特下一而字以見費処即是隱。如註所云、乃是費中有隱耳。横渠云、緩詞不足以尽神、斯之謂歟。故余嘗疑、先儒所以然・所当然六字、恐鑿也。

〔訓読〕

余が友、彭日華、性穎利たり。嘗て余に謂ひて曰く、曾て旧本を見るに、中庸集解の費隱章に云ふ、費にして隱とは、費を言へば而ち隱なり、と。當時言下に大悟の後、竟に之を忘れ、思量し出でず。余丙戌の歲に、先師に聞きて、始めて此の意を知る。蓋し子思、政に後人の体用と作して看（了）るを恐る。故に特だ一の而の字を下して以て費なる処は即ち是れ隱なるを見す。註に云ふ所の如きは、乃ち是れ費中に隱有るのみ。横渠の云ふ、緩詞以て神を尽くすに足らずとは、斯の謂ひか。故に余嘗て疑らくは、先儒の所以然・所当然六字は、恐らくは鑿ならん。

〔語釈〕

○彭日華 未詳。

○中庸集解費隱章云、費而隱、言費而隱也 未詳。

○費隱章 『中庸』に、「君子の道は費にして隱なり。夫婦の愚も、以て与り知るべきも、其の至れるに及びては、聖人と雖も亦た知らざる所有り。夫婦の不肖も以て能く行ふべきも、其の至れるに及びては、聖人と雖も亦た能くせざる所有り。天地の大なるも、人猶ほ憾む所有り。故に君子大を語れば、天下能く載すること莫し、小を語れば、天下能く破ること莫し」とある。

○丙戌歳 嘉靖五(一五二六)年。なお董濬の入門は、嘉靖三(一五二四)年、守仁五十三歳、濬六十七歳の時のことである。

○子思政恐後人作体用看了 朱熹『中庸章句』は「君子之道、費而隱」に注して「費は用の広なり。隱は体の微なり」とする。

○横渠 張載、北宋の道学者。字は子厚、横渠先生と称される。著書に『正蒙』・『横渠易説』・『経学理屈』などがある。

○緩詞不之謂歟 『横渠易説』繫辞下では「窮神知化、徳之盛也」について「形而上なる者は辞を得るも幾んど象を得るのみ。神は不測為り、故に緩辞以て神を尽くすに足らず、緩なれば則ち化す。化は難知為り、故に急辞以て化を体するに足らず、急なれば則ち神に反す」と注されている。

○所以然所當然 朱熹『大学或問』に「天下の者、則ち必ず各々然る所以の故と其の当に然るべき所の則と有り」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

『明儒学案』には「費処即是隱、不作体用看」という一条があり、本則の内容をまとめている。

【五十】

宋儒所以怕談空者因懲於晉人之俗也。殊不知空之為字、乃仲尼・顔子明文。晉人以清虛為宗、大無見識、与空相反、正是不空。豈可論於聖人之空哉。大哉空乎。以空宅心、則曰寂然不動、則曰廓然太公。以空処事、則曰感而遂通、則曰物来順応。無意無必此空也、無固無我此空也、無言無知、無思無為、無可無不可、皆此空也。聖人空一心以達万変、其中洞然不見一物、而為衆父裕然有余。乃因遜虚之士、併空弗講、豈非因噎廢食者哉。

〔訓読〕

宋儒の、空を談ずるを怕れる所以の者は晋人の俗に懲るに因る。殊に空の字たるを知らず、乃ち仲尼・顔子には明文あり。晋人、清虚を以て宗と為すは、大いに見識無く、空と相反し、正に是れ不空。豈に聖人の空を論ずべけんや。大なるかな空や。空を以て心に宅さば、則ち寂然不動と曰ひ、則ち廓然太公と曰ふ。空を以て事に処せば、則ち感じて遂に通ずと曰ひ、則ち物来たりて順応すと曰ふ。意無く必無きは此れ空なり、固無く我無きは此れ空なり、言無く知無く、思無く為無く、可無く不可無きは皆な此れ空なり。聖人、一心を空にして以て万変に達し、其の中、洞然として一物を見ず、而して衆父と為りて裕然余り有り。乃ち遜虚の士に因り、空を併け講ぜざるは、豈に噎に因りて食を廢する者に非ざらんや。

〔語釈〕

○仲尼・顔子明文 『論語』子罕篇に「子曰く、く空空如たり。我其の兩端を叩きて竭くす」とあり、

先進篇に「子曰く、回や其れ庶きか、屢々空し」とある。

○清虚 清浄で虚無であること。『淮南子』主術訓には「故に有道の主は、想を滅し意を去り、清虚にして以て待ち、之が言を代はらず、之が事を奪はず」とある。

○寂然不動・感而遂通 『易』繫辞上に「易は思ふ无きなり、為す无きなり。寂然として動かず。感じて遂に天下の故に通ず」とある。

○廓然太公 『河南程氏文集』卷第二、「答横渠張子厚先生書」に「廓然として大公、物来たりて順応す」とある。

○無意無必 『論語』子罕篇に「意母く必母く固母く我母し」とある。

○遜虚之士 「遜」は退避の意。「遜虚之士」は隠逸の士のこと。

○因噎廢食 『淮南子』説林訓に「噎を以て死する者有りて、天下の食を禁ず」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【五十一】

無為而治即是為政以德。聖人不作聰明、故万事自理。後□□□□黃老、故多為費詞、以出□□眼而卒失聖人之実也。

〔訓読〕

無為にして治まるは即ち是れ政を為すに徳を以てす。聖人は聰明を作さず、故に万事自ら理む。後儒は黃老に近づくを嫌ひ、故に多く詞を費やすことを為し、以て字眼を出脱して卒に聖人の実を失ふ。

〔語釈〕

○無為而治 『論語』衛靈公篇に「子曰く、無為にして治まる者は其れ舜なるか」、『老子』第三章に「無為を為さば則ち治まらざること無し」とある。

○為政以德 『論語』為政篇に「子曰く、政を為すに徳を以てすれば、譬へば北辰の其の所に居て衆星の之に共かふが如し」とある。

○出脱 脱出と同じ意で抜け出ること。

○字眼 字、語句、言葉。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔校異〕(四)

「尊經閣文庫本」は「□□□□」を「儒嫌於近」に、「□□」を「脱字」に作り、本則はこれに従って読んだ。

【五十二】

聖人言性相近即是同也。習始相遠、故上智下愚不移合為一章、良是。然相近二字大有斟酌當時、昔無知音。程子云、善固是性、惡亦不可不謂之性。

〔訓読〕

聖人、性、相ひ近しと言ふは即ち是れ同じきなり。習ひは始めより相ひ遠し、故に上智下愚移らず、合して一章と為すは良に是なり。然るに「相近」の二字は大いに當時を斟酌する有り、昔、知音無ければなり。程子云ふ、善は固よりはれ性、惡も亦た之を性と謂はざるべからず、と。

〔語釈〕

○性相近・習始相遠 『論語』陽貨篇に「子曰く、性、相ひ近し、習ひ相ひ遠し。子曰く、唯だ上智と下愚とは移らず」とある。

○故上智下愚不移合為一章 『論語集注』の「子曰、唯上智与下愚不移」の圈外説に「此れと上章

(子曰、性相近也、習相遠也)と当に合して一と為すべし、子曰の二字は蓋し衍文ならん」とある。
○斟酌 事情をくみとり、考慮する。

○程子云、善固是性、惡亦不可不謂之性 『河南程氏遺書』卷第一、五六条には「善固性也、然惡亦不可不謂之性也」とあり、本則の引用と字句の異同がある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【五十三】

放於利而行多怨、在邦無怨、怨是用希之怨俱与不怨天同。自我而言方是著実工夫。若人之怨否、豈計之哉。以直報怨即是不報無怨故也。

〔訓読〕

利に放りて行へば、怨み多し、邦に在りて怨み無し、怨み是を用て希なりの怨み、俱に天を怨みずと同じ。我よりして言へば方に是れ著実の工夫。人の怨否の若きは、豈に之を計らんや。直を以て怨みに報ゆとは即

ち是れ怨み無きに報いざるが故なり。

〔語釈〕

○放於利而行多怨 『論語』里仁篇に「子曰く、利に放りて行へば、怨み多し」とある。

○在邦無怨 『論語』顔淵篇に「己の欲せざる所、人に施すこと勿れ。邦に在りて怨み無く、家に在りて怨み無し」とある。

○是用希之怨 『論語』公治長篇に「子曰く、伯夷・叔斉、旧悪を念はず、怨み是を用て希なり」とある。

○不怨天 『論語』憲問篇に「子曰く、天を怨みず、人を尤めず、下学して上達す」とある。

○怨否 怨恨、非議の意。

○以直報怨即是不報無怨 『論語』憲問篇に「或ひと曰く、徳を以て怨に報いば、何如。子曰く、何を以て徳に報いん。直を以て怨みに報い、徳を以て徳に報ゆ」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【五十四】

今夫天斯昭昭等处正指其誠也。天只是一点明、地只是一撮土、山只是一拳石、水只是一勺水。亘古如此、別無忒也。所以他無窮広厚広大不測功用如此、只是一真実。

〔訓読〕

今夫れ天は、斯れ昭昭等の処は正に其の誠を指す。天は只だ是れ一点の明、地は只だ是れ一撮の土、山は只だ是れ一拳の石、水は只だ是れ一勺の水。古に亘りて此くの如く、別に忒無し。所以に他の無窮・広厚・広大・不測の功用此くの如く、只だ是れ一の真実のみ。

〔語釈〕

○今夫天斯昭昭等处、無窮・広厚・広大・不測 『中庸』に「今夫れ天は、斯れ昭昭の多きなり。其の窮り無きに及びては、日月星辰繋り、万物も覆はる。今夫れ地は、一撮土の多きなり。其の広厚なるに及びては、華嶽を載せて重しとせず、河海を振めて洩らさず、万物載る。今夫れ山は、一卷石の多きなり。其の広大なるに及びては、草木之に生じ、禽獸之に居り、宝蔵興る。今夫れ水は、一勺の多きなり。其の測られざるに及びては、蠶羅蛟龍魚鼈生じ、貨財殖す」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【五十五】

成己是成物的主意、成物は成己の工夫。成己在成物裏。君臣・父子・夫婦・長幼・朋友、処之各得其当、而在我、親・義・序・別・信之徳立而身修矣。此正是合内外即是時措之宜。若曰既得於己、自然及物、恐成己無下手処、竟成兩套生也。

〔訓読〕

己を成すは是れ物を成すの主意、物を成すは是れ己を成すの工夫。己を成すは物を成す裏に在り。君臣・父子・夫婦・長幼・朋友、之に処して各々其の当を得、我に在りては、親・義・序・別・信の徳立ちて身修まる。此れは正に是れ内外を合すれば即ち是れ時に之を措きて宜しきなり。若し既に己に得、自然、物に及ぶと曰はば、恐らくは己を成すこと下手の処無く、竟に兩套生ずるを成す。

〔語釈〕

○成己是成物的主意、成物は成己の工夫・合内外即是時措之宜 『中庸』に「誠なる者は自ら己を成すのみに非ざるなり。物を成す所以なり。己を成すは仁なり、物を成すは知なり。性の徳なり。内外を合するの道なり。故に時に之を措きて宜しきなり」とある。

○既得於己、自然及物 朱熹『中庸章句』第二十五章には「誠は己を成す所以と雖も、然れども既に以て自ら成す有れば、則ち自然として物に及びて道亦た彼に行はる」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【五十六】

君子不□□□執、蘇子由一説良是。悪作去□、□君子所以不拘小信者。悪乎執也与君子貞而不諒、大人言不必信意合。

〔訓読〕

君子、亮かならざれば、執を悪む、蘇子由の一説良に是なり。悪は去声と作し、君子の小信に拘はらざる所以の者を言ふ。執を悪むと君子は貞にして諒ならず、大人は言必らずしも信ならずと意、合す。

〔語釈〕

○君子不亮、悪乎執 『孟子』告子下篇に「孟子曰く、君子は亮ならず、執を悪めばなり」とある。

○蘇子由一説良是 蘇子由の説ではないが、『孟子或問』卷十二には「張子亦た諒を以て必ず信なりと為し、悪を読むに去声に従ふ」とある。

○悪作去□ 「校異」(四)にしたがい「悪作去声」とする。董滂は「悪」を去声で読んで動詞とする。意は「嫌う、嫌がる」となる。『集注』は「悪」を平声で読んで疑問詞とし、それに従えば「悪んぞ執ならん」となる。

○君子貞而不諒 『論語』衛靈公篇に「子曰く、君子は貞にして諒ならず」とある。

○大人言不必信 『孟子』離婁下篇に「大人は言必ずしも信ならず、行ひ必ずしも果ならず。惟だ義の在る所」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔校異〕(四)

「尊經閣文庫本」は「□□□」を「亮悪乎」に作り、「□、□」を「声言」に作り、本則はこれに従って読んだ。

【五十七】

權即是經。程子之言至当不易。權之定理為經、經之活法為權。

〔訓読〕

權は即ち是れ經なり。程子の言は至当不易なり。權の定理は經為り、經の活法は權為り。

〔語釈〕

○權即是經 『河南程氏遺書』卷第十八、二二一条に「權は只だ是れ經の及ばざる所の者、輕重を權量し、之をして義に合せしめ、纔かに義に合すれば、便ち是れ經なり」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【五十八】

何莫由斯道、何莫当訓孰非、嘆日用而不知耳。

〔訓読〕

何ぞ斯の道に由ること莫きや、「何莫」当に「孰非」（孰かくに非ざる）と訓ずべく、日に用ひて知らざるを嘆く。

〔語釈〕

○何莫由斯道 『論語』雍也篇に「子曰く、誰か能く出するに戸に由らざらん。何ぞ斯の道に由ること莫きや」とある。

○日用而不知 『易』繫辞上に「百姓は日に用ひて知らず、故に君子の道は鮮し」とある。

〔校異〕（一）

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）

本則は『明儒学案』には収められていない。

【五十九】

象山云、予欲無言、即是言了。此象山發聖人之蘊也。余因是悟夫子不答之意、而疑先儒或未尽。且南宮括既懷此擬而夫子復避嫌疑。彼此窺何、是豈聖賢氣象哉。因偶成一詩云、此事何須苦勘磨、兀然無語正森羅。

若探問意難為答、夫子胸中答已多。

〔訓読〕

象山云ふ、予言ふこと無からんと欲す、とは即ち是れ言（了）ふなり、と。此れ象山、聖人の蘊を発く。余、是れに因りて夫子答えざるの意を悟り、先儒或いは未だ尽くさざるを疑ふ。且つ南宮括、既に比擬を懐きて夫子、復た嫌疑を避く。彼此何をか窺ふ、是れ豈に聖賢の氣象ならんや。因りて偶成の一詩に云ふ、此の事何ぞ苦だ勘磨するを須ひん、兀然として語無きは森羅を正す。若し意の答へを為し難きに探問すれば、夫子の胸中、答へ已に多からん。

〔語釈〕

○予欲無言、即是言了 『象山先生全集』卷三十四、語録上。

○且南宮括既懷比擬而夫子復避嫌疑 『論語』憲問篇に「南宮适、孔子に問ふて曰く、羿は射を善くし、羿は舟を盪かす、俱に其の死を得ず。禹稷は躬ら稼して天下を有つ。夫子答へず。南宮适出ず。子曰く、君子なるかな、若かくごとき人。徳を尚べるかな、若き人」とある。孔子は南宮适に直接に答えていないが、南宮适のいないところでその問いに答えているということ。

○此擬「校異」(四)にしたがい「比擬」とする。「比擬」の意はくらべなぞらえること。

○予欲無言 『論語』陽貨篇に「子曰く、予言ふこと無からんと欲す。子貢曰く、子如し言はずんば、則ち小子何をか述べん。子曰く、天何をか言はんや。四時行はれ、百物生ず。天何をか言はんや」とある。

○勘磨 考えなやむこと。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔校異〕(四)

○此擬 「尊經閣文庫本」は「此」字を「比」字に作り、本則はこれに従って読んだ。

【六十】

千経万典総不如一部論語。万世受用不尽、擬撲不破、真聖書也。然聖人至妙、至妙処又在書外、細思之、端可一笑。故曰書不尽言、言不尽意、程夫子云、心之精微、口不能宣、不其然乎。偶成一詩云、無限聰明人、只到十分住。更有十一分、問著不知處。要知十一處、非後亦非前。昨夜波心月、三更□□□。

〔訓読〕

千経万典総て一部の論語に如かず。万世に受用尽きず、擬撲破れず、真の聖書なり。然るに聖人の至妙、

至妙の処は又書外に在り、細思の端は一笑すべし。故に曰く、書は言を尽くさず、言は意を尽くさず、と、程夫子云く、心の精微、口に宣ぶる能はず、と、其れ然らざるか。偶成の一詩に云ふ、限り無く聰明の人、只だ十分に到りて住まる。更に十一分有れば、知らざる処を問(著)ふ。十一処を知るを要むるも、後に非ず亦た前に非ず。昨夜の波心の月、三更、上天に飛ぶ。

【語釈】

○擲撲不破 覆すことができないこと。『朱文公文集』卷第三十六、答陸子美(二)に「語(一)無極而太極(二)、精密微妙にして窮まり無く、向下説く所の許多の道理、条貫脈絡、井井として乱れず、只今便ち目前に在りて、古に亘り今に亘り、擲撲破れず」とある。

○書不尽言、言不尽意 『易』繫辭上に「子曰く、書は言を尽さず、言は意を尽さず。然らば則ち聖人の意は、其れ見るべからざるか」とある。

○程夫子云、心之精微、口不能宣。不其然乎 『河南程氏遺書』卷第十八、九七条に「言に得ざれば心に求むる勿れとは不可なり、此れ人を観るの法なり。心の精微、言に得ざる者有り、不可とは便ち不知を謂ふ、此れ告子の浅近の処なり」とある。これは『孟子』公孫丑上篇の「告子曰く、言に得ざれば、心に求むる勿れ。心に得ざれば、氣に求むる勿れ、と。心に得ざれば、氣に求むる勿れとは、可なり。言に得ざれば、心に求むる勿れとは、不可なり」についての解釈である。

○波心 波のまんなか、水心。

〔校異〕（一）

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔校異〕（四）

「尊経閣文庫本」は「□□□」を「飛上天」に作り、本則はこれに従って読んだ。